

漢文学習のすゝめ

● 國學院大學文學部教授

赤井益久

(あかい・ますひさ)

一 漢文学習の意義

言うまでもないことであるが、「国語」は「言葉」を教える教科である。

これもまた自明のことであるが、「言葉」は概念の把握や物事の認識をつかさどる。したがって、観念形成や倫理秩序の理解に不可欠であり、感情や思想は言葉によって表明され、人間同士のコミュニケーションの主要な手段となる。人間にとって生きる上でのもつとも大切にして根底に関わると言つてよい。その教育が、いま軽視されている。

中等教育から高等教育にかけてグローバル化が叫ばれ

ているが、国際化は同時に自己の文化への深い理解の上に立脚することを忘れるべきではない。同時に言語活動は、国際化という空間に広がるだけでなく、時間軸にも広がっていることにも思いを致すべきであろう。

古典教育はその意味で、じつに効果的であることを指摘したい。自国の文化理解と言うけれども、それは文学や歴史、古今の生活への理解を通してはじめて地に着いた知識となる。また、対的かつ批判的視点をもってみずからを見つめることができ、はじめて相互理解がかなう。古典教育としての「古文」「漢文」は、その教材の宝庫であると言つてよい。

受験科目から漢文をなくせば受験生が増えるといった迷信は、日本人が生きる上で欠くことのできぬ言語活動の歴史性と対的認識を学ぶ機会を生徒諸君から奪つたのである。また、実際の日常には役に立たぬという謬見は、おそらく浅薄狭隘な言語観によるもので、我々の使用する言語そのものはすでに悠久な歴史と数多の蓄積の上にある。

したがって、現在の我々を取り巻く卑近な言語活動のみに注意を奪われてはならないのであって、広く古典に視野を広げることによって逆に相補的な効果を期待できるのであり、迂遠な道のに見えてじつは捷徑なのであ

る。

二 古文学習との連携および文法の要点

古典の時間数が削減されていく中、効果的な学習計画を立てる必要がある。

漢文は中国の文語文をわが国の古典文法に従って読む方法であるから、古文の学習と連携することによって互いに効果を期待できる。具体的な例を挙げれば、三省堂『新編国語総合』により古文で学習する助動詞を示すと三十二あり、このうち漢文学習で学ぶべきは、受け身「らるる」、使役「しむ」、打ち消し「ず」、完了「たり」、推量「む（ん）」、断定「たり・なり」、伝聞推定「なり」、比況「ごとし」のほぼ十であり、若干の出入りがあっても古文学習の三分の一は漢文学習で頻出する。したがって、古文学習と連携することでそのニュアンスの相違や語感を効率的に学習できるだろう。

漢文は、いったん定着するとその読み方が踏襲される傾向にある。使役の「す・さす」は使用例がごく少なく、音読されるサ変型動詞は「しむ」に集約される傾向にある。漢字音の音読動詞の多用は日本語彙を飛躍的に増やした。サ変型動詞は漢文学習でマスターしたい。受け

身構文は動作者と被動者の違いを漢文では明確に意識する。「為人（人となり）」の「為」の意味を解釈する際に、古文の「たり・なり」の知識はおおいに参考になる。

また、漢文では主格の「が」は登場せず、所有格の「が」だけが現れる。副助詞は「のみ」（限定）「すら」（抑揚）「まで」（範囲）「ばかり」（程度）が用いられ、その他の用例はないといつてよい。再読文字は「未」「将」「当」「応」「宜」「須」「猶」「蓋」の八つであり、本来の中国語としては一字を二度読むわけではない。いわゆる陳述の副詞を助動詞と共に把握した先人の語感には鋭いものがあり、例えば「未」を「いまだ」（せ）ず」として読んだ解釈はいわゆる時間副詞を意識した打ち消しで、過去に遡って否定している語感がよく分かる。「将」も「まさに」（せ）んとす」と解釈したのも動作の進行や状態をよく言い表している。

文法的な事項は、基本文型は五つと考えられるが、「主語＋述語」構造、述語が目的語を取る「述語＋目的語」構造の理解をするのが基本である。句法的には否定形↓使役形↓受け身形↓疑問・反語形↓仮定形↓比較形↓抑揚・累加形へと進むと効果的である。使役と受け身は、ある動作を上下の方向性から見た場合、上から下に及ぶのが使役、下から見た場合が受け身となる。目前の事柄

を前提にそれを否定して強調する反語は、中国人の好む言い方である。

三 漢文学習の方法

朗読の多用と「辞書引き」作業を勧めたい。

漢文の文献がわが国に舶載され、その受容を通して日本語の表記の定着に漢文が大きな影響を与えてきたことはすでに自明なことである。したがって、日本語の形成過程においては、和文脈のみならず漢文脈がその発展形成に大きく寄与した。そのリズムや語感を体得することは、今日の言語活動に大いに資するものがある。不慣れを恐れる必要はない。国語の修得は、反復練習にある。発語は言語活動の基盤であると同時に、呼吸は句切れと密接に関係する。日常言語と異なる古典語に親しむことによって、抽象的で高次の言語活動に慣れることができる。まずは教師が二度ゆつくりと範読し、のち段落ごとに斉読すると良い。「あに…せんや」「…するあたはず」「…せずんばあらず」などの言い方に慣れる。やがて意味とリズムが合致するようにしたい。

「辞書引き」作業の効能は三つある。一つは、作業であるので個人の能力を基本的に問わない。二つ目は電子

辞書にはない一覧性が、漢字をビジュアルで認識し、部首や漢字構成について全体的構造的な理解を得やすい。また、辞書によって得た文法的な知識は、記憶する際に合理的な説明によれば忘れにくい。

たとえば、『新編国語総合』の漢文教材に出てくる「是」は、①「是亦走也。（是も亦た走るなり）」（五十歩百歩）②「何日は帰年。（何れの日かは是れ帰年ならん）」（杜甫、絶句）③「疑是地上霜。（疑ふらくは是れ地上の霜かと）」（李白、静夜思）④「匡廬便是逃名地。（匡廬は便ち是れ名を逃るるの地）」（白居易、香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁）⑤「自是之後、客皆服。（是よりの後、客皆服す）」（鶏鳴狗盜）の五例であり、三省堂『全訳漢辞海』を調べてみると、①⑤が代名詞であって「人・事物・時間・場所」などを示す。②③④は、断定・判断をしめす動詞であり、「繫辞（けいじ）」。肯定判断を表し、英語の be 動詞に相当する。」と説明している。同じ「これ」「この」と訓じても、「之」「此」には後者の意味はない。古典教育は国語教育の一環として、若人の言語活動の重要な育成を担っている。けっして看過すべきではなく、軽視すべきではない。